HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第34号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2012-11-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73584
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_34.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第34号
No. 34　November,　2012

【特集１】オープンアクセスウィーク！みんなの活動＜速報＞
【特集２】平成24年度　機関リポジトリ中堅担当者研修
【特集３】新BOAI　大解説
【特集４】ICOLC Fall Meeting 2012

オープンアクセスウィーク！みんなの活動＜速報＞

今年は10月22日～28日がオープンアクセスウィークでしたね。みなさんの図書館でもイベントおこないましたか？DRF OAW事務局に届いたみなさんの活動を速報で紹介します。

龍谷大学

大学院生アルバイトさんたちによるOAミニ説明会を開催

筑波大学

館内職員向け研修で、大学院生の佐藤翔さんの講演。

鹿児島大学

レファレンスカウンターにポスターを掲示。ハロウィンの飾り付けも。

熊本大学

図書館でプチ展示をしました♪

東京歯科大学

5日間連続インタビュー「突撃！となりの研究室」をしました！手に持っているのはしゃもじです。

奈良女子大学

今年も鹿をデコってみました☆

国立民族学博物館

「話題」と「笑い」満載の二日間でした☆

大学共同利用機関における
リポジトリに関する情報交換会

大阪大学

職員もオレンジの服を着てOAWを演出中！

奈良県立医科大学

奈良医大バージョンの三角スタンドを作っています

DRF新任担当者研修

講師のTシャツに注目☆☆☆☆

みんなの☆OAグッズ☆

ポスター・ブックカバー・
三角スタンド・返却期限票☆☆
右記 drf wiki でチェックしましょう！

オープンアクセスウィークの
写真、活動を投稿しませんか？
DRF OAW 事務局: oaw @ lib.hokudai.ac.jp

オープンアクセスウィーク DRF wiki
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?OAWeek_2012
本特集に掲載できなかったイベント・企画・展示素材が盛りだくさん！

特集2

平成24年度 機関リポジトリ 中堅担当者研修

9月26日～28日、国立女性教育会館を会場に、今年度の中堅担当者研修を行いました。受講生は12名。

今年が二度目となる当研修、昨年の反省と最新動向も踏まえて企画を十分に練り直し、今年はぐっとパワーアップしました。

寺島さん（奈良女子大学）のレポートをお届けします。

研修初日 9月26日

会場図書館見学
研修の初めに、女性・家庭・家族に関する専門図書館である女性教育情報センターと、女性アーカイブセンターを見学させていただきました。

国内機関リポジトリの現況と今後の展望
山本和雄（北海道大学）

登録件数などの統計を見て現況を把握し、リポジトリの問題点を意見交換しました。
アイスブレイクとして緊張感もほぐれました。

オープンアクセス出版の動向
杉田茂樹（小樽商科大学）

オープンアクセスジャーナルのいろいろ、Finchレポートを巡る攻防について、お話しいただきました。オープンアクセス関連年表が詳しくて、とてもわかりやすかったです。

受講生の感想
PLOS ONEやeLifeといった新しいコンセプトのOA出版誌が出て来ていることを知り、今後、機関リポジトリをどのように発展させていけばよいのか考えさせられました。

機関リポジトリの管理
鈴木雅子（旭川医科大学）

リポジトリ管理者の心得や、ふだんの業務で気を配るべきポイントの解説。
OAI-PMH出力の確認、削除済みレコードの扱い、クロスウォーク修正の実演を見せていただきました。

受講生の感想
・自館のOAI-PMHの設定も見てみないといけないと思いました。
・（クロスウォーク修正の実演について）　「修正簡単でしょ！」というイメージは効果的ですね。

情報交換会

クイズ大会で、DRFのマークや、OA運動の第一人者スティーブン・ハーナッドさん、月刊DRFの説明キャラクター Dr. F の『うろ覚えお絵かき』をしました。

一日目終了
中堅研修では、受講生も講師も女性教育会館で泊まり込み（合宿）でした。

二日目は班討議で始まりました。
朝から晩まで、講義や班討議が続きます。

二日目 9月27日

班討議

事前課題について班ごとに話合い、発表しました。
みなさん詳しく予習をされていました。

事前課題　(1班) オープンアクセスウィークの各国の取り組みをまとめて、DRF参加機関を巻き込むような活動を企画せよ。(2班) リポジトリを機関全体の事業とするための方策を考えよ。(3班) 文科省 学術情報基盤作業部会の文書を読み、批判せよ。(4班) Finchレポート及びこれに対する反応をまとめ、日本の図書館員はどう反応すべきか述べよ。

受講生の感想
・事前に調べる時間がなかなか取れなくて大変でしたが、まとめる事で問題意識が少し高まった気がします。
・班内で様々な意見も出て楽しかったです。
・他班の発表もとても参考になりました。
・Finchレポートを読みとくのは、難しかったが、英語でOAの話題を追いかけることに対して、苦手意識がなくなったように思います。

海外メーリングリストの議論を追う
栗山正光（常磐大学）

Global Open Access List (GOAL)を中心に、海外メーリングリストの議論を紹介いただきました。昨年からのアメリカの助成研究OA義務化禁止法案(RWA) や、助成研究OA化法案(FRPAA) をめぐる一連の議論の流れがわかりました。

受講生の感想
英語は苦手だし難しそうだからとDRF-MLの話題でも逃げ腰でしたが、こうやって解説してもらうと少し興味がわきました。

海外から見た日本の機関リポジトリと図書館専門職
内島秀樹（筑波大学）

日本の大学図書館サービスの改革の多くは海外の影響を受けていて、海外動向のリサーチは大切です。CSIや科研費による海外調査のノウハウをお話しいただきました。

受講生の感想　海外との圧倒的な差をあらためて知りました。そしてDRF があって良かった。個人や個々の大学では難しいと思うけど、DRF という団体があることで、できる事があるような気がします。

前年度受講者事例報告
南絵里子（小樽商科大学）

１教員につき２図書館員を担当に専属司書制についてお話していただきました。真似したいアイデアが沢山ありました。

寺島陽子（奈良女子大学）

リポジトリと研究者データベースの連携をした話をさせていただきました。失敗談がうけました。

受講生の感想　着実に進んで行かれるように見えていましたが色々御苦労もあるとのこと、逆に本学だけじゃないんだ！と勇気づけられました。

いかに他部門を巻き込むか
（講演・グループワーク）
松尾睦（神戸大学）

松尾先生は経験学習を研究されています。
マネジャーとして成長するために必要な経験についてお話しいただき、グループワークでは、他部署との連携について互いの経験を話し合いました。とてもわかりやすく、楽しい講義でした。

受講生の感想　他部門との連携が大切ということは認識していたのですが、そのことを理論的に教えていただき、また、どうするべきかを具体的に示していただいてとても良かったです。グループワークでは他大学さんの事例を共有できてよかったです。

松尾先生の講義は「わかりやすい」「面白い」と大好評でした！

機関リポジトリ業務運営上の課題
尾崎文代（広島大学）

大学の他部署をまき込んだリポジトリの運営体制、異動の可能性を常に考えて人材育成する、などのお話をいただきました。リポジトリ担当者に求められることは色々だけど、いまできることを考えましょう、とのことで、次の班討議に続きます。

受講生の感想　身近な問題を考えるきっかけとして、ヒントをいただきありがたかったです。リポジトリの芽……探してみたいと思います。

班討議：コンテンツ収集のための新機軸を含めて、業務の年間計画を立てよ（アイディアとルーチンワーク）

新機軸を一つ以上入れて年間計画をたててみました。班ごとにホワイトボードにまとめて発表しました。
どの班もきちんと計画をたてているなか、講師班の自由すぎる意見が笑いをとりました。

研修は最後まで盛りだくさんでした。
青山さんのプログラムは、終わった後に受講生もDRF講師陣も笑顔になる、楽しい時間でした。

最終日 9月28日

コミュニケーションスキル
青山千景
（青山プロダクション
接客マナーインストラクター）

研究者とのコミュニケーション向上に必要なのは、「笑顔・オーバーリアクション・演技力」とのこと。実践練習を行いました。気分は女優です。

受講生の感想
・やはりコミュニケーションスキルのプロの先生の講義は、新鮮かつとても刺激的でした。本学に戻って実践できるよう、まず練習したいと思います。
・コミュニケーションの「いろは」がとてもわかりやすかったです。少しでも実践していきたいと思いました。

雑誌価格問題への抵抗史
尾城孝一（国立情報学研究所）

研究者コミュニティ・SPARC・JUSTICEによる商業出版社への抵抗と敗北の歴史をお話しいただきました。
商業出版社は手強いと思いました。

受講生の感想　「抵抗史が敗北史である」ゆえ図書館員、特にOAにたずさわっている方々が熱くなるということ、感じました。生の声、本音が聞けて興味深かったです。
・このままGold OAが進んだ時、大学図書館は何をしなければならないか、機関リポジトリをどのように発展させて行けば良いかを考える良いきかっけになりました。

修了式

全員が「これからの一年でやること」の「宣言」を発表し、修了証書をいただきました。充実した３日間でした。

全宣言
☆ 英語の勉強をやり直して苦手意識をなくす（→情報収集へ繋げる）。
☆ 過労で倒れない。「分際」を見定める。ニッチを見極める。
　医学系WEKO使いとなる。
☆ 次の担当者を育てる。（ともに担当する人を探すことから）
☆ 学術雑誌の登録件数を増やす。（部下にも経験する機会を用意する）
☆ 協力部署を明記した、IR運用指針を全学的に承認してもらう。
　他部門にもIR仲間を！ withコンテンツ。
☆ 紀要の電子化を終了させる！
☆ 大学の10大ニュース入り（めざせTOP5!!）
☆ kernelにとって何か１つ新しいことをする
☆ DRF技術WGのワークショップを満員にする
☆ 学内で機関リポジトリのサポーターを増やす
☆ 「日本では研究できない」をなくす（from図書館）
☆ 広報に力を入れる。パンフ作成。バージョンアップ。

大学なき時代の大学図書館のあり方
土屋俊（大学評価・学位授与機構）

大学図書館の消滅と再生のシナリオをお話しいただきました。
再生の鍵はラーニングコモンズとリポジトリです。

受講生の感想　ショッキングな話題提供をありがとうございました！常に危機意識を持ち仕事したいと思います。
・図書館の講習で中々触れられないテーマの話で良かったです。

研修全体の感想
☆ ぜいたくな研修でした。次の担当者を送り出してあげたい。

☆ 課題に苦しみ、ビクビクしながら参加したのですが、始まってみるととても楽しく充実した研修でした。ありがとうございました！3日間で学んだことを業務に活かし、また他の人にも還元したいと思います。

☆ もりだくさんの内容でしたが、講義をきくだけでなくグループ討議などもあり、受け身の研修ではなかったので、集中力が切れることなく受講できました。研修参加に不安があったのですが、みなさまのおかげで脱落することなく受講できたのでよかったです。

☆ 楽しく勉強させていただきありがとうございました。二次会も楽しかったです。お世話になりました。

特集3

新BOAI 大解説

2002年にブダペスト・オープンアクセス運動（Budapest Open Access Initiative: BOAI）により提唱された「ブダペスト宣言」から、今年で丸10年を迎えました。先ごろ、これからの10年に向けた提言が発表されました。それがBOAI10（新BOAI）です。

2002年のBOAI（ブダペスト宣言）は、オープンアクセス（OA）を実現する手段として、研究者による セルフアーカイビングとオープンアクセスジャーナルという二つの戦略があるとし、その後のOAの方向性を示した歴史的宣言です。
それから10年、OAジャーナルが隆盛している今において、新宣言はどんなものか？　大学図書館と機関リポジトリはどのような役目を期待されているのか？　図書館員として知っておかねば、な新BOAIを、大解説します。

DRF翻訳チームでは、BOAI 10の全文を日本語訳しました。本特集では、その日本語訳を元にしたBOAI 10の抜粋・解説、翻訳チームの感想コメント、翻訳監修陣の解説コメントを掲載します。

機関リポジトリの位置づけに意義がある

解説：栗山正光（常磐大学）

BOAI10 は10年前にうたいあげられた理想を再確認しつつ、われわれが出発点にとどまっているわけではないものの目標に到達したというわけでもない、まさに道半ばにいるという認識を示し、次の10年で何をなすべきか、具体的な提言を行なっています。

この提言には、これまでに起こった出来事や議論が色濃く反映されています。たとえば、大学や研究助成機関は研究者が確実に成果をリポジトリに登載するような方針を定めるべきとか、OA誌で出版する際の費用を補助すべきといった具合です。最近のgratis(無料) OAかlibre(自由) OAかという議論に関しても該当する条文がありますが、できるだけCC-BY相当の自由利用許諾を推奨するといった、双方の立場に配慮した外交文書のような表現になっています。

図書館にとっては、機関リポジトリが真っ先にインフラとして位置づけられている点が意義深いと思います。

今後の10年に向けた、具体的なガイドライン

解説：加藤信哉（名古屋大学）

2002年のBOAIは、学術文献をインターネット上で自由に利用できるようにすることを目的とした宣言で、オープンアクセスの定義を行い、その実現のための二つの道である、セルフアーカイビングとオープンアクセス雑誌を提示しました。

これに対して今回の提言は、BOAIの目的と手段を再確認するとともに10年間のオープンアクセスの進展を踏まえ、今後の10年に向けた新しい目標を、ポリシー（7項目）、ライセンスと再利用（1項目）、基盤と持続可能性（13項目）、アドボカシーと協調（6項目）に分け、具体的なガイドラインとして示したものです。

個人としては、学術情報の粒度がジャーナルから論文に移行していることを受け、雑誌レベルのジャーナル・インパクト・ファクターを論文の質の評価指標として用いる弊害（愚）を指摘し、論文レベルの新しい評価指標の開発を強調している部分が印象に残りました。

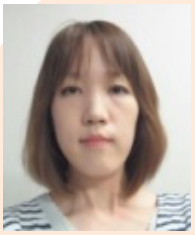
【ポイント解説】
ブダペスト・オープンアクセス・イニシアティヴから10年
：デフォルトをオープンに

プロローグ

新宣言のプロローグでは、BOAIの理念とその意義を再確認するとともに、OAが研究成果公表の標準的な方法となっている状況を、今後10年の目標に設定しています。

1. ポリシー

・大学は次のような内容のポリシーを持つべき、としています。
　所属教員のピアレビューされた論文や、学位論文のリポジトリ登載を保証する。
　教員が論文投稿先を選べる自由は尊重する。
　オープンアクセス誌での出版を奨励する（要求ではない）。
・研究助成機関は次のような内容のポリシーを持つべき、としています。
　助成に基づくピアレビューされた論文のリポジトリ登載を保証する。
　出版者がオープンアクセスを認めない場合は、被助成者に出版者を変えるよう要求する。
　OA猶予期間は 6 カ月を超えるべきではない。
　可能であれば、CC-BY 相当の自由な OA (libre OA) を要求する。
両者ともに、メタデータは入手可能になり次第リポジトリに搭載し OA とすること、フルテキストは許可が得られ次第 OA とすることを求めています。



プロローグについて
西薗由依（鹿児島大学）
2002年の宣言から10年が経過し、オープンアクセスをとりまく環境の変化を踏まえた上で、あらためてBOAIの理念とその意義が再確認されています。
これからも前進する、という強い決意表明に心動かされました。

1. ポリシーについて
杉田茂樹（小樽商科大学）
大学のOAポリシーに関する勧告では、論文投稿先について、教員の自由を尊重すべき（should respect）、と研究者の自律性を擁護しているのに対し、助成機関のOAポリシーに関する勧告では、OAを許容する雑誌を選ぶよう被助成者に要求するべき（should require）、と強硬なのが印象的でした。

・インパクト・ファクターを研究者個人の評価に用いることを諌めるとともに、それ自体への疑問も呈し、雑誌・論文・著者のインパクトや質を示す新たな指標の開発を求めています。
・政府や大学に対して、研究者の評価のために、研究論文全てのリポジトリ登載を要求すべきとしています。
・OA対応していない出版者を公共の利益に反する態度だと批判し、研究者に対して、みずからの利益に反する出版者に寄与しないよう求めています。

2. ライセンスと再利用

・学術的著作物の公表・配布・使用・再利用には、CC-BYライセンスが最適とし、OA誌にもこのライセンスを推奨しています。
・有料アクセス ＜ 無償アクセス ＜ 自由なアクセス ＜ CC-BYライセンスにおける自由なアクセス、の順に望ましいとした上で、現状よりもよりよい条件が可能な際には現状にとどまらず、できる時にできる事を成し遂げるべき、としています。

3. 基盤と持続可能性

・高等教育機関はなんらかの形でリポジトリサービスを提供すべきとしています。機関リポジトリ、主題リポジトリに加えて、在野を含むすべての研究者はリポジトリに登載する権利を持つべきとし、万人向けリポジトリの必要性を訴えています。
・複数のリポジトリへの登載について、登載の手続きが一度で済むよう求めています。
・リポジトリと学術雑誌の双方に、ダウンロード、使用、引用情報を著者が利用できるようにすべき、と求めています。
・大学や研究助成機関に対し、有料誌の購読中止による経費節約のために、著者支払型OA誌の出版手数料の支援を行うよう求めています。また、支援の条件としてオープンライセンス下の自由なアクセスを要求すべきとしています。
・パラグラフやイメージ等任意のレベルでの識別やリンキングが可能となるオープンな規格の創出、OA誌・リポジトリで相互運用可能なツールの発展、論文本文がデータやマルチメディアコンテンツと有用な形式で統合される新しい形式の開発を推奨しています。
・従来の出版前査読システムとOAは共存可能と主張しながらも、システム改善のために、出版後査読とその有効性についての研究を推奨しています。

4. アドボカシーと協調

・OA出版を専門的に行うことの基準と意識を高め、基準を満たしていない出版者に対しては、その改善を支援すべきとしています。また、OA出版者・OA誌の評価にオープンアクセス学術出版社協会（OASPA）を活用すること、OA出版者はOASPAに参加することを推奨しています。
・OAコミュニティが一層協調した行動を取るよう求め、活動の重複を最小限にし、相互調整すべきとしています。例えば、論文のOA化活動だけでなく、多様なコンテンツのOA化活動との協働や、直接的な関連性は低い活動との協調も行うべきとしています。
・すべてのステークホルダーのOA理解を促進し、OAを推進するため、働きかけを行うとともに、以下のようなOAについての真実を、証拠と共により多くのステークホルダーに伝えるべきとしています：

学術的な利益だけでなく経済的な利益ももたらすこと
研究の社会的価値を高めること
コストは現状への追加予算なしに回収可能であること
著作権と矛盾しないこと
研究の質の最高水準と矛盾しないこと

BOAIの日本語訳を読んでみよう

BOAI 10特集は、いかがでしたか？
英語原文および全文の日本語訳が、BOAIウェブサイト（※）で公開されています。ぜひ、全文を読むことにトライしてみてください！
日本語訳は、土屋俊先生（大学評価・学位授与機構）に全体監修をしていただいています。
土屋先生ありがとうございました！　また、時実象一先生（愛知大学）との共同訳となっています。
※BOAIウェブサイト　http://www.opensocietyfoundations.org/openaccess
日本語訳（近日公開予定）http://www.opensocietyfoundations.org/openaccess/boai-10-translations

CC-BYって？
クリエイティブ・コモンズ（CC）ライセンスのうち、もっとも自由な再利用が可能なものです。CC-BYとされた場合、BY——原著作者のクレジットを付すことにより、複製、頒布や、二次的著作物を作成できることができます。
学術論文では、アクセスできる以上に、機械的な分析にかけるなどの様々な活用方法が可能となります。

内島秀樹（筑波大学）
BOAIの新しい”Recommendation”は、2001年以後のOAと機関リポジトリの進捗をカバーしており、機関リポジトリをOAという観点から考えるとき、ほぼやるべきことを網羅している印象です。ただ、日本と欧米の学術コミュニケーションの在り方に相違があるので、これをアダプトした、「和製の推奨プラン」があるといいですね。CSI終了後の課題として、機関リポジトリコミュニティ（の出がらしでない若手）でそんなプランを考えるのも楽しいかと思いました。

BOAIを翻訳して
小笠原静華（大阪大学）
今回の翻訳を通して、BOAIが目指しているものを再認識することができました！

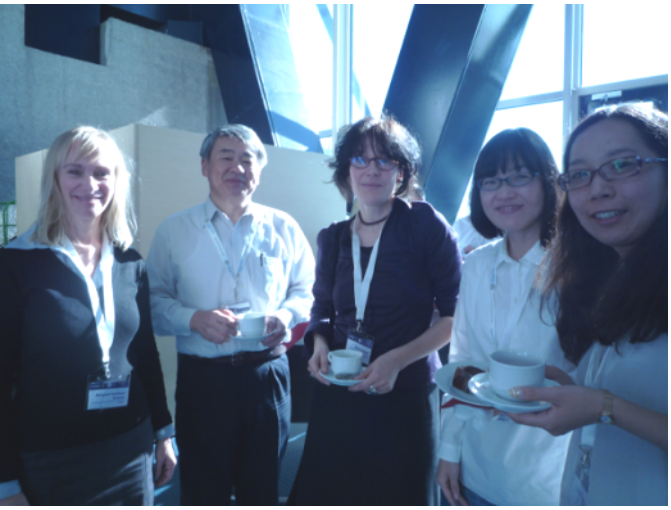
BOAIを翻訳して
稲永晶子（琉球大学）
いつも誰かが訳してくれるのを待っているので、今回は新しく出されたBOAIの宣言を、自分で頭をひねって訳することができて良かったです！

BOAIを翻訳して
城恭子（北海道大学）
学術出版を巡る状況はこれからも絶えず変化していくのでしょうが、BOAIの旗印のもと、オープンアクセスの実現に向けて、世界中の仲間と一緒に頑張って行きましょう！

ICOLC International Coalition of Library Consortia

2012 Europe Meeting
（10月14日～17日・ウィーン大学）

各国のコンソーシアムからの活動報告、PDA（利用者駆動型選書）や過去の購読規模に依存しない新たな契約額積算モデルに関する議論など、さまざまな話題が取り上げられました。オープンアクセスの話題も、会期全般にわたり、頻出していました。



左からキャスリン・シーラー（CARL）、土屋俊（大学評価・学位授与機構）、ビルギット・シュミット（COAR）、鈴木雅子（旭川医科大学）、柴田育子（一橋大学）

参加者所感

土屋　俊（大学評価・学位授与機構）

「株式市場から見た欧州におけるSTM出版」と題し、Exane BNP Paribas（投資顧問会社）のサミ・カッサブ氏によるSTM出版の現況概括があった。STM出版に投資の価値があるのは、財政縮減の中でも研究助成は減少していないからだ。すなわち、STMはコンスタントに利益を出せる可能性があるということ。カッサブ氏の観測によれば、サブスクリプションモデルは依然として不動の地位にあり、少なくとも向こう3～5年の間はその位置は揺るぐことはない。しかし注目すべきは、以前はキワモノの「運動」とされていたオープンアクセスが、ビジネスの対象となったことだろう。つまり（喜ぶべきか悲しむべきかは別にして）投資家の目からみても、オープンアクセスがひとつのビジネスモデルとなったということなのだ。

杉田　茂樹（DRF企画WG／小樽商科大学）

CARLのキャスリン・シーラー氏からCOAR OA契約問題タスクフォースの活動中間報告がありました。特別な契約で出版者版PDFのリポジトリ登録が認められた事例、出版者がリポジトリ登録を代行（有料も無料もあり）などする事例などの紹介がありました。ほかAPCの機関一括払いや割引契約もすすんでいるそうです。

（参考）COAR OA契約問題タスクフォース
http://www.coar-repositories.org/working-groups/licenses-task-force/

ICOLC ウェブサイト：http://icolc.net/

世界一美しい図書館

おしえて Dr.F

ICOLC会議はウィーンで開催されたそうじゃな。ウィーンには「世界一美しい」と評判のオーストリア国立図書館プルンクザールがある。しかし、ウィーン大学中央図書館閲覧室もそれに劣らずたいしたものじゃ。

国立図書館プルンクザールは1720年代の建築じゃ。

そして、これがウィーン大学中央図書館じゃ。
ICOLCの会議ディナー会場が、
なんと閲覧室だったそうじゃの。

それからウィーンは食べものも魅力じゃの。
上はICOLC会議の休憩で給仕されたおやつ、
下は高名なウィーンカツレツじゃ。

Facebook はじめました。 DRFの活動、オープンアクセス、機関リポジトリに関して、親しみやすい議論の場を提供しています！ 気軽にコメントや「いいね！」をお寄せください。
http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation

12月号予告　【特集】第９回デジタルリポジトリ連合全国ワークショップ: DRF9レポート

月刊DRF読者アンケート回答受付中！　http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

編集後記　オープンアクセスウィーク、みなさまいかがお過ごしでしたか？（misuzu）

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/　月刊 DRF 第 34 号　平成 24 年 11 月 1 日発行　デジタルリポジトリ連合